Ⅲ　馬と学習院とのかかわり　1

学習院における馬術教育

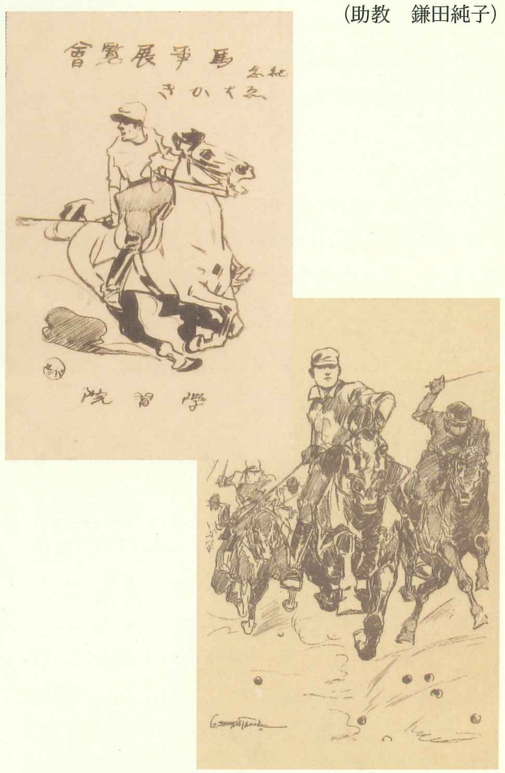
明治 12 年（1879）10 月 18 日、神田錦町にあった学習院では院内の馬場開き「馬術開業式」が行われた。学習院の馬術教育の幕開けである。学習院は開院当時、華族会館が経営する学校として、「華族ニ海陸軍士官タルヲ勧奨シ」という趣旨のもと、学科に軍事に関する内容が盛り込まれた。そのなかに馬術は含まれ、正規の授業、すなわち正課とされた。学生馬術教育は、学習院が日本で最初であった。

明治 23 年（1890）、三浦梧楼院長による教育改革で軍事教育が重視されると、中等学科・高等学科に「武課」が設けられ、ここに体操や乗馬、馬学が含まれた。その後、学生数に見合う馬数の不足などが理由で、馬術は正課から外された時期もあったが、常に馬術は盛んであった。院内馬術大会や打毬大会が恒例となり、御所で天覧試合が行われることもあった。明治 40 年に乃木希典が学習院長に就任すると、馬術はさらに振興、乃木院長自ら馬術の練習を巡視、遠乗にも参加した。乃木は馬の世話から指導し、馬術を通じて学生たちに精神面における成長を期待したのではないかと考えられる。

こうした学習院の馬術教育をささえたのが歴代の錚々たる馬術教官たちであった。明治期においては、騎兵大尉・花嶋半一郎、元主馬寮技手・白極兵治、大正期には海軍の父といわれた山本権兵衛の甥で、元陸軍騎兵大尉・山本盛重などである。また、学習院初等学科卒業生の中には昭和 7 年（1932）のロサンゼルス・オリンピックで優勝したバロン西こと西竹一や、馬の挿絵画家として名を馳せた谷洗馬がいた。

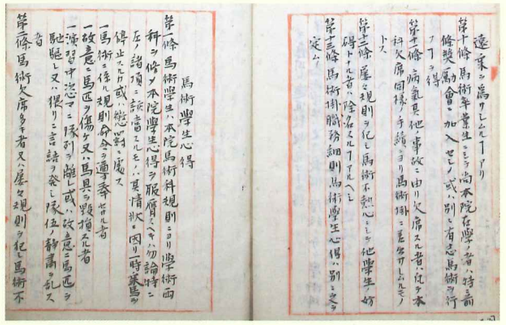
第二次世界大戦下において学習院の馬術教育は不遇の時代を迎え、厩舎についに馬が一頭もいなくなった時期が昭和 23 年（1948）から 5 ヶ月間あった。しかし戦後、新制学習院において授業での馬術こそなくなったが、部活動として華々しく復興した。

（助教　鎌田純子）

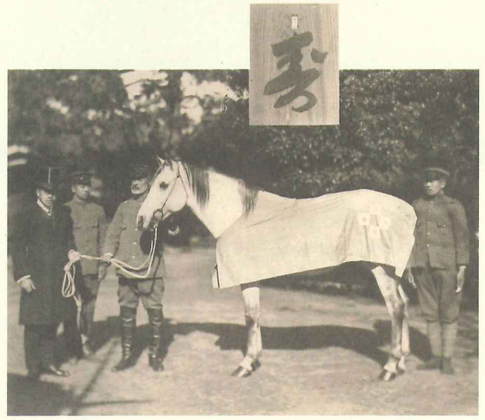


谷洗馬画絵葉書　大正 15 年

山本盛重絵葉書画「乗馬演習」明治 38 年



「例規録」明治 35 年（学習院アーカイブズ蔵）



寿号写真（乃木希典から佐伯友文に贈る）明治 39 年（個人蔵）

乃木号写真（佐伯友文から乃木希典に贈る）明治 45 年（個人蔵）

乃木希典と愛馬「寿号」と、その仔「乃木号」

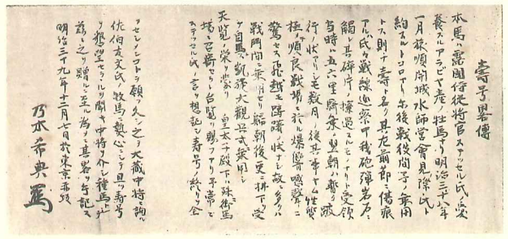
人と馬との歴史を考える上で感慨深い 2 枚の写真がある。左は、明治 39 年（1906）12 月 7 日、乃木希典が愛馬寿号を鳥取県赤碕の牧場主・佐伯友文に贈る日の記念写真。右は、明治 45 年 5 月 24 日、寿号の仔である、乃木号を佐伯友文から乃木に贈った日の記念写真である。どちらも赤坂の乃木邸内で、馬の手綱を手にしている人物がそれぞれ、乃木と佐伯である。寿号は贈られる日、乃木家の家紋入り馬衣を付けていた。

寿号は、周知の通り乃木希典が第三軍司令官をつとめた日露戦争で旅順攻略後の「水師営の会見」の際、旅順要塞司令官ステッセルが乃木に贈った馬である。その名はステッセルの「ス」からとっている。青山練兵場で挙行された凱旋大観兵式の時に乃木が乗馬していたのは寿号であった。アラブ種の寿号は、体格が良い上に従順な性格の名馬で、乃木はこの血統を日本に広めるべく馬種改良に熱心であった佐伯に贈った。その後、寿号は佐伯牧場で約 80 頭に及ぶ仔馬を産出。その中から寿号によく似た 1 頭を、今度は佐伯が乃木に寄贈。これが乃木号である。本写真にみる若馬であった頃の乃木号の毛色は黒っぽく、馬籍簿からも確認できる通り、芦毛であった。芦毛は年を経て白い毛に変わる種類であるため、我々が他の写真に見る乃木号の姿はたいてい白馬である。

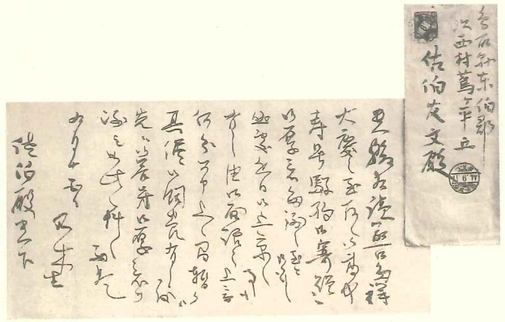
ところで、写真にうつる乃木の、乃木号をみる眼差しは実に優しげで、馬への深い愛情を感じさせる。だが、乃木と乃木号が共に過ごした時間は短く、この日から 4 ヶ月も経たない同年 9 月 13 日、乃木は明治天皇に殉死したのであった。乃木家の馬丁の語るところによれば、自刃する日の朝、乃木はカステラを手に一杯かかえて厩に立ち、愛馬たちと永遠の訣別をしたという。

乃木は明治 40 年 1 月から大正元年 9 月に自決するまで学習院長として、「高尚なる人格」養成を理想とし、訓育を重視、その後の学習院の教育に多大なる影響を与えた。明治 41 年に校舎が目白に移転されると、全寮制とし、自らも質素な宿舎で学生と共に起居した。この頃の乃木の狂歌に「寄宿舎で楽しきことを数ふれば撃剣音読朝めしの味」というものがある。学生に対し、厳しくも慈愛あふれる教育者としての一面が偲ばれる。馬術を通しては、雨の日、雪の翌日は馬が滑るから乗馬は控えよ、遠乗のあとは自分の喉を潤すよりまず先に馬に水を与える。当時の学生がみた、乃木が馬を大切に思う行動の逸話は枚挙に暇がない。馬事を通して乃木が学生たちに伝えようとしたことは、何であったのだろうか。乃木亡きあと、その愛馬乃木号は学習院の馬として昭和 12 年（1937）まで生き、学生たちに「乃木さん」と慕われて、学習院の馬術教育にその一生を捧げたのであった。

（助教　鎌田純子）



乃木希典の自筆による寿号略伝
明治 39 年 12 月 7 日付（個人蔵）



寿号の仔馬について乃木から佐伯に宛てた書簡
明治 44 年 9 月 15 日付（個人蔵）